

## 知事と区市町村長との意見交換（文京区）

令和1年10月17日（木）

14時20分～14時40分

○行政部長 では、知事から一言お願いします。

○知事 成澤区長には都庁まで御足労いただいております。ありがとうございます。また、日頃からの御協力等々、ありがとうございます。

本日、長期戦略ビジョンの策定に先駆けまして御意見を伺うという機会でございますので、どうぞよろしく願いいたします。

それから台風19号、文京区の方では様々な課題はあったかと思えますけれども、今回も思いがけなく大きな台風になりました。各地連携させていただいて進めているところですけど、そういったことも含めてお話をいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○行政部長 では区長、よろしく願いいたします。

○文京区長 貴重な時間をちょうだいしまして、ありがとうございます。私どもからは例えば鉄道を延伸するとか、駅の高架化を進めてくれとか、そういう要望はございません。

今日お願いしたいのは、まさに今回都の長期ビジョンが、バックキャストの手法を使っておやりになるということで、私どもも今計画づくりしていますが、非常に重要な視点で機を同じくしてできるんじゃないかなというふうに期待をしております。

1つは妊娠、出産、子育ての切れ目のない支援について、今までの子育て支援から転換する必要があるという問題提起です。

これはどういうことかと言うと、子育て支援というのは実は保護者支援に偏っていて、育児と仕事の両立支援と言われる、例えば保育園をつくったり、学童保育をつくったりというのも、これは私はよく待機児童という言葉は実は日本語として間違いで、待機をしているのは児童ではなくて、待機をしているのは職場に復帰できない保護者だと。だから待機保護者が本当は正しい日本語なんだと、常に申し上げています。例えば心理的不安の解消にしても、保護者の心理的不安の解消だし、金銭的な負担感の軽減にしても保護者の懐具合の話であって、そのことによって子供そのものに直接の支援ではないと。

私達は子供そのものに対する直接の支援が必要だということで、例えばハッピーベイビープロジェクトという妊娠する前の段階の中学生段階からそういった知識をしっかりと習得して、健康づくりに着目をしていって、男女ともに加齢によって、女性は卵子が老化し、男性はすぐ泳げない精子が出来るというのは医学的なエビデンスのある話ですので、そのようなことを学習しながら健康づくりをしようというプロジェクトです。あとはスターティング・ストロング・プロジェクトといいまして、これはOECDのつくり上げた考え方に基づいて、東京大学の教育学研究科との連携事業ですけども、具体的には心理職の人間が保育園や幼稚園に直接に出向いて、発達に問題のある子供達を早期に見つけ出して支援に繋げていくことによって、小1プログラムをはじめとした問題に対応できるようなことをや

ろうと。これは子供そのものの成長に対する支援になっています。

また、例えば来年度からロタワクチンが国で定期接種化されるという話がありますが、このロタが定期接種化されるようになると、ロタを打ってしまうことによって実はそのウィルスに感染してしまう。元々その免疫不全の子供達が、今実際にいるということをお隣の大学の方達からも私達お聞きをされていて、予防接種、いろんな予防接種によって病気になるような子供を防ぐために、血液スクリーニングによってそれを避ける取り組みというのが、大学病院で今実験的に行われているようで、例えばロタが定期接種になるのであれば、前端的にそういう血液スクリーニングを組み合わせることによって、それは何万人に一人かもしれないけども、予防接種によって健康障害を受けてしまう子供を救うような取り組みを東京都が行うということは、その子供そのものに対する支援になると。

子供そのものに対する支援というものを、これからどう取り組んでいくのかということをお一緒に考えていきたいなというふうに思います。

もう1つはこれも東京都の長期戦略ビジョンの中で大きな位置付けになっていて、我々の今の計画づくりの中でもそうですが、Society5.0の問題です。

Society5.0に、実はこれまで熱心だったのは、東京よりも地方の道府県の方が熱心に取り組まれていて、その5Gの導入についてもいろいろなことを県で取り組んでいらっしゃる所が多かったんですが、実は最もそれを必要としているのは僕は首都圏だろうと。特に東京だろうという同じ問題意識を持っています。

例えば2020大会でも選手村では自動運転の移動の手段というのができるというふうに聞いていますが、各区では都バス等の交通手段だけでは救えない人達、交通不便地域を救うためにコミュニティバスの事業をどの自治体でも、これは多摩も含めて取り組んでいます。このSociety5.0で例えば自動運転ができるようになると、バスは必要なくなるし、一方通行の細い道は元々バスが入りませんから、そこが今度は小型化された自動運転がオンデマンドで行くようになると、高齢者や障害者の新しい足の確保に繋がるわけで、僕は特に23区でこういった社会実験に取り組むべきだというふうに思っておりまして、東京都が様々なこれからSociety5.0に向けた取り組みをかなり強力に推し進められるというふうにお聞きしているので、その時にはぜひ実験の場は23区の中から選んでいただくことが、我々の共通の悩みを解決することに繋がるのではないかなというふうに思っているところです。以上です。

**○知事** ありがとうございます。最初は子育て支援に関しての御意見をいただきました。区長の御考えと同じで、私も待機児童対策、これは一番最初に知事として取り組んだ課題であります。それが3年目にして大分効果も出てきて、8千数百人いた待機児童が今3,000人台に減っているということは、基本的に5,000人の女性が社会で活躍する場が確保できていると。と同時に子育てができているということだというふうに翻訳して、いつもお話するようにしております。女性の力を活かさないでどうするんだと常々思っていましたので、これは子供さんにとってもプラスであり、かつ女性にとってもプラスと考え

ております。

子供を持ちたいと願う全ての方が安心して子供を生み育てられるようにするという、これまでも区市町村とも連携協力して、様々な施策を展開してきたわけでありまして、今後とも皆様と連携して、あらゆる分野の施策の総動員で、都における子供子育て家庭を支援する、環境の整備を推進をしていきたいと思っております。

それから Society5.0 です。これは今回、宮坂さんという IT 業界におられた方を副知事としてお迎えをしております。そしてこの件については、今日も Society5.0 の会議もございまして、より実装を進めていこうと。それによって様々な働き方そのものも変えていこうという取り組みを進めているところであります。

情報システムを共同利用することによって、システムコストの削減ができるということからも、既に有志の皆さま方と勉強会等を通じて、プログラムやシステムを導入するのは結構な経費が掛かるわけで、そこをどういう形で最も有効なシステムづくりができるのか、コストパフォーマンスがいい形が出来るのか、そこをよく連携させていただくことによってお互いがよくなるということではないかと思っております。

自治体における ICT 利活用に関する講演会で、その場を活用していただいて意見交換、情報共有を行っているということでもあります。

それから副知事の方からちょっと一言。

**○副知事** ロタウィルスの予防接種のお話をいただきました。おっしゃるとおり、予防接種は大切ですけど、やっぱり一方でいろいろな弊害も生じていることも事実でございますので、やはりその医療行政という言い方がいいかどうか分かりませんが、やっぱり東京都の役割として改善にしっかりと取り組んでいきたいと思っておりますので、またいろいろ御助言をいただければと思います。ありがとうございます。

**○知事** それから子供さんへの直接の支援ということ、重要かと思っております。例えばゆりかご東京等、大変に御好評いただいておりますし、私はずっとフィンランド議連の会長やっていたりして、ネウボラという形で幼稚園だろうが、保育園であろうが、小学校であろうが、子供がどこに属しているかというよりも、その子供を中心とせずずっとフォローするという仕組み。これはネウボラ東京にも通ずるところでありますので、これらをどうより効果を上げていくか等、研究もしていきたいし、いろいろと現場をお持ちの皆様方からの御意見いただきたいと思っております。

それから先ほどの Society5.0 にも関係しますけれども、自動運転の関係ですね。これは言うまでもなくこないだも高齢者の運転については免許の返納から、後付けの装置に都としての支援を付けさせていただいたりしていますが、さらにそれを先に進めれば自動運転という形になるかと思っております。

それからバス等も最近では本当にニーズが高まっているけれども、一方で運転手さんがいないという現実的な話があるわけでございます。これらについては東京自動走行ワンストップセンターで自動運転の公道での実証実験の支援をいたしております。

地域の公共交通については地域ごと、交通の状況やニーズが異なりますので、それらに

対してきめ細かく応える必要があろうかと思えます。

文京区には日本を代表する自動車産業の本拠地もあるわけでございますし、またここは国際競争の真っ只中にあるわけで、これらのことをより安全で、より確実で、よりこのテクノロジーとして進んだ形を日本で実現する、東京で実現するということは、今後の東京が世界に発信する、もうスポーツだけではありません、文化そして元々は技術の発信にも繋がるということですので、今日のお話のことをしっかり承っております。

○行政部長 区長、いかがでしょうか。

○文京区長 最後の話ですけど、先日も東大の松尾先生、AIの松尾研の皆さん達が本郷バレーの取り組みをされて、私もそのイベントに参加しました。知事は東京バレーとおっしゃっているけど、でもこないだ松尾研で聞いてよく分かったのは、研究とそのスタートアップがほぼ近接していないと、要は同じ人が両方やっているんですね。その近接性がとても大事だと。

文京区役所、後樂園の近くまで来れないのかと。そうすれば我々もオフィスを提供したり、インキュベーション施設をつくったりする可能性があるんだけどって話をしたら、あの距離でももうだめだって言うんですね。

なので、東大の周辺のまちづくりみたいのを東京都と協力してやるのも可能性としてあるのかもしれないし、そういう集積の拠点をつくっていくことが、我々としてもできるんじゃないかなと思っているので、そういう研究者の皆さんともいろんな情報交換をしながら進めていきたいと思えます。ぜひ東京都の力もお借りをしたいと思えます。

○行政部長 よろしいですか。

○文京区長 まだあるの。

○行政部長 もうちょっと時間あります。

○文京区長 せっかくなので、ちょっとお耳に入れようか、実は悩んでいたのですが、ここ2年間、東京都と考え方を同じにしてるつもりであったのに、補助対象にならなかったという事業が2つあります。

1つは庁舎の災害時の非常用発電機の設置についてです。これはなぜならなかったかと言うと、我々も同じ問題意識だったので、同じベクトルを向いて進めたところが、我々の事業決定と契約等々の手続が都の補助基準が決まるより早かったからというのがその理由でした。

2つ目は学校の体育館の冷房化です。去年のあの猛暑を受けて、さすがに誰しもこのままではいけないと思えますよね。それでうちは途中で補正予算を計上して、一步早く踏み込んだんです。それこそその時に中井教育長が、文京区さんはもう100%冷房が入っているって言うけどどういうやり方してるんだか、ちょっと担当から連絡させるから教えてくれと言われて、東京都の補助基準ができるんですよ。そうすると、うちが半歩前にいってたんで、東京都の補助基準より先だからこれも補助対象から外れたんです。

でも、ベクトルが同じだったら僕は遡及適用すべきだと思うんですよ。なので、これが2年続いたので、やはり知事のお耳に入れて、そういうところは。

○知事 先駆的な例として。

○文京区長 そこは先にやったって対象にしてあげれば、もっとやる気が出るじゃないですか。なので、そういう努力を削がないようにしていただければありがたいというふうに思います。

○知事 地震等の際も、自立の考えで先に自分で避難場所を見つけた方は、それはケアの対象にはならないということがあって、自助努力が報われないという例は残念ながらいくつもありまして、パブリックとすれば、やはり対象になかなかそっちの方に向かえないところを助けるということが、どうしても出てくるということだと思います。

ただ一方でおっしゃるように、自助努力でがんばったところはむしろ褒めてあげるというような制度が必要かと思えますけど、この辺はちょっと当局の方と打ち合わせしながら。

○文京区長 待機児童もそうなんです。

○知事 なるほど。

○文京区長 待機児童も0が続くと補助率が4分の3から2分の1に減る。

○知事 そうですね。

○文京区長 待機児童だって減らした所ほどもっと頑張れと言ってあげないと。

○知事 すごくよく分かりますよ。

○文京区長 0にしないんですと。

○知事 はい。

○文京区長 しないほうが補助率が高いんだったら。ない方がいい。

○知事 前に一生懸命に出生率を上げたら、返って過疎債の対象にならなくなってがっかりしてるというのも聞いた。この辺のところは、やはりどうやってインセンティブを付けるかということなんだろうというふうに思います。

財政の問題とルールの問題とのせめぎ合いだとは思いますが、おっしゃる意味はよく理解できます。どう対応をするかは、ちょっと検討したいと思えます。

○行政部長 それではそろそろお時間になりますので、これで意見交換を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○文京区長 どうもありがとうございます。